

共同課題の討議摘録

オーガナイザー 山田安彦（千葉大）

発表者（発表順） 元木 靖（埼玉大）：日本列島の東西差における稲作の役割
末尾至行（関西大）：水力開発利用をめぐる地方差について
竹内啓一（一橋大）：国内の地域的ディコトミー比較の視点

——イタリア南部問題に焦点をあてて——

西川 治（立正大）：日本の東西、その共通性と独自性

谷岡武雄（立命館大）：東北日本と西日本とを歴史地理学的に対比させることは可能か

山田安彦

長い時間にわたり、先生方の基調講演を聴講していただきありがとうございました。只今から相互の質疑応答、討議に移りたいと思います。冒頭に申し上げましたように、標記の課題では両者の比較・対比ということも大切ですが、どうして地域構造が兩分的に対比的になったかということについて、あるいはこれにかからずに活発な論議を展開していただきたいと思います。予め質問用紙を渡してありましたので、それらの質問用紙をまとめてみますと、個別の先生方にご質問なさる場合と、共通課題に関して全基調講演の先生方に対して質問なさっている場合と2つあるのですが、最初はまず個別の先生方のお話に対して、質問がありますので、それについてお答え願いたいと思います。

まず、谷岡先生に「フランスの東西の地域は何をもって分けるか」ということで、それにあわせて東北日本と西南日本の境界あるいは境界帯をどこに考えるか、ということをお答え願えればありがたいと思うのですがいかがでしょう。

谷岡武雄

最初に私はフランスを今日的な意味でル・アーブル、マルセイユの2つの港、大西洋に臨んでいるル

・アーブルと地中海のマルセイユ、これをほぼ斜めに国土を切るような形で境界線を引かれるということをお願いしました。それがどういう理由であるかということを示せ、というご質問でございますが、まあいろんなメルクマールがございます。例えば、一人当たりの所得によって一番はっきりするわけでございます。それから、生産性の違いということで統計的にある程度処理できますけれど、それは決してラインではなしにゾーン、いま山田先生がおっしゃったようなゾーンであるに違いありません。

フランスの東西区分についてまとめて申しますと、ル・アーブル、マルセイユはラインでなしにゾーンであるということ、そしてその東側はECの発展の中軸地帯の一部を形成するということ、その境界を分けるメルクマールとしては人口の増減、一人当たりの所得、生産額の違い、そういうようなもので統計的にも見いだすことができる。それから政策的に言えば、移転の奨励と免税という政策的な違いで分けることができるわけでございます。

そこで日本では、東北日本と西南日本をどのようにして分けるのか。時代によって東北日本と西南日本の境界が非常に移動している。しかもその境目は、これもラインではなくゾーンである。極端に言えば、

中世末の豪族屋敷と環濠集落の場合では、非常に極端な例でございますが近江、伊賀以東が東北日本となり、それから山城、大和、以西が西南日本になるということもいえる。また古代の条里制などを問題とした場合ですと、美濃から以西は、どちらかというときとキャピタルの周辺地域という形で西南日本的な性格を帯びているし、越中、尾張以東は東北というような感じになってくる。だから、非常に時代によって違ってきます。

山田安彦

どうもありがとうございました。同じ質問があります。それはイタリアの場合について、南北の地域は何をもって分けるか。そして、ちなみに東北日本と西南日本との境界はどことお考えになるかということなのですが。それでは竹内先生お願いします。

竹内啓一

まず日本のことから申します。ほとんど谷岡先生がおっしゃったとおりで、色々な側面について境界線は変わらざるを得ない。それは歴史的に見ても確かであろう。私はイタリア南北問題と比べた場合、日本の東北日本と西南日本という対比、あるいは対立と申しますか、そのようなものはそれほど顕著ではないと申しました。歴史的に見た場合で、西川先生がおっしゃった二極構造は、谷岡先生がおっしゃいましたように、江戸というものが出来てから顕著になってきた。

それから時代的に見た場合、当然東というものの範囲は、ずっと西の方まで境界線は寄っていたであろうと思います。

それに対してイタリアの南北、とくに南部という場合には、かなりはっきりしております。私がお配りしました中で私が書いております。ここでは第二次世界大戦後の南部開発事業の現状というのをあげておきました。結局、開発政策というものを行うならば、行政的な範囲を明確にしなければいけない。お配りしましたいくつかのデータでは、北部、中部、

南部というように分けてデータを出してある場合もあります。この場合の南部は、今いいましたような南部の範囲ですけれども、場合によっては中部、北部に分けることもあります。しかし、大きく南北対立と呼ぶ場合には、狭い意味で分けた北部と中部を北部に含めて考えております。

山田安彦

ありがとうございました。同じような質問を全発表者にということなのですが、「東北日本・西南日本の区分を考えるとすれば、地域の等質性と結節性のどちらに重点を置くべきか」ということについて、日頃地域論を盛んに研究されております西川先生にお願いしたいと思います。

西川 治（立正大）

どこでそれをスパッと境を引けるか、区分することが果たしてどういう意味があるのか。区分できた時代と、それから区分が次第に意味をなさなくなってくる。つまり、その区分というのはもちろん、自然的に成り立ってきた地域の境を科学的に見つけて境をつける、という場合ですね。それに対して、人為的に境をつける場合、これは研究上地域を区分するのもそうですが、行政上その他諸々の目的で範囲を指定する、という二通りあります。むしろ近現代社会では、人為的に境をつけるということの意味がむしろ多いです。それに対して、一方矛盾するようですが、その境を越えて地域のある文化部分が交流する、つまり、より広域の地域を生活圏、構造圏にしていくという傾向があるわけです。むしろ、地域を人間が組織するという観点と、いわゆるはっきりした境をもたない地域観が機能分担しながら交流し、さらにより大きな地域へと組織されているのだと、そういう見方の方がより現代的ではないか、と考えております。しかし、本日の東北日本と西南日本というのは、やはりある時代に典型的なものの同志を両者比べれば、つまり理想型的に比べれば対比は可能だけれども、地域論で昔からいわれているように、

核心部分どうしを比べれば違いは明瞭だけれども、その周辺はその両方が混ざり合ったりしており、なかなか線が引きにくい、つまり境界帯であります。

山田安彦

どうもありがとうございました。また、両極に分けるのが正当か正当でないかということがありますが、それは次に回しまして、今までの3先生のおっしゃった中で、つまり東北日本と西南日本を分ける境界帯はどこかということが問題になると思います。さらに地域の等質性か結節性かということも、いま答えていただいたのですが、これに関連してお聞きの先生方から質問はございませんでしょうか。いろいろな質問があるかと思います。

高野史男（立正大・非）

今、3先生にお答えいただいたのですが、東北日本と西南日本とを分けて議論しているわけですから、ではどうして分けるのか、どこで分けられるのか、ということが問題なわけですね。歴史時代、東日本の勢力と、京都を中心とする西日本の勢力とが歴史上いつも争っていた。そういうところから日本の歴史は展開してきたということができると思います。そうすると、なぜそのような境や対立ができるのかということになりますが、近世・近代においても、東日本と西日本との対立みたいなものが続いて残っている。それが現在まで続いている。ただし、そういう東西のゾーンであるか何かわかりませんが、そこら辺に境がある。東北日本・西南日本という今まで続いてきたものが、近代においては、いわば結節地域的な、あるいは機能地域的といってもいいかもしれませんが、そういう区別がなくなりつつあるのが現在ではないか、という気がするのです。それが、フランスの場合あるいはイタリアの場合、日本の場合とは少し違うのではないかと思います、質問をしたわけです。

山田安彦

境界線と申しますか、あるいは境界帯と申します

か、それができるのに何か障害、あるいはフェンスみたいなものがある、ということなのでしょう。

文化圏に対しては色々と説がありまして、文化圏というものはあまり正当性がないという説もありますが、境界ができるというのはなぜか、それはどこにできるのか。地形とか気候とかの障害があるのではないかというお話のように伺ったのですが、いかがでしょうか。

高野史男

それは日本の場合には確かにあると思うのですが、フランスの場合ですとかイタリアの場合なんかには、なぜそのようなものが存在しないのに差が出てくるのだろうか、ということです。

山田安彦

わかりました。まず谷岡先生いかがでしょうか。

谷岡武雄

フランスの場合にはほぼローワール川に沿った東西線によって、これもゾーンと考えていただきまして、北と南がかなり文化的に違っているということがいえるわけでございます。地理学者のアルベル・ドゥマンジョンなどのデータを参考にしました歴史家のマルク・ブロックは、フランスの農業の基本的性格として北の三圃制、南の二圃制ということをはっきりとっております。中央集権化が進む中で、文化の地域的な違いがなくなっていく。それに反発する形で、地方文化の振興というものが出てきてまして、とくに遅れた社会では地方文化の振興・地方の復権ということを唱えまして、過激な行動をやりかねない。私自身は少なくとも歴史地理学的な現象と今までいわれてきたものを取り上げて、その分布構造を調べるかぎりでは、ミヤコとヒナのの違いで説明できることが多くて、ミヤコに比べてヒナは遅れているけれども、ヒナも経済的に発展しているからやがてミヤコに近づいた、そういう形でしか説明ができない。

山田安彦

高野先生がおっしゃっているのは、私なりの解釈では、境界線ないしは境界帯ができるところには何かがあるのではないか、という意味です。車が止まるにはいろいろな理由があって止まるので、訳なく止まるのではない。ここに降りたいから止まる、ここに石があるので止まるか、というように。文化が流れてくるけれども、どこかで止まる。なぜそこで止まらなければならないのか、というお話だったように思いますが。

中山正民（早稲田大）

今の谷岡先生のお話を伺っていて、三圃式と二圃式というのは、どういうふうにしてその地域の差異と関わっているのですか。

谷岡武雄

これは風土性によるものです。地中海地域ですと、夏は暑いですし、冬雨地域ですね。それで地中海性気候のところでは二圃制になります。二年に一回休むということです。三圃制はもっと雨の量が多いから三年に一回休閑地を作るということで、北フランスになるわけです。

高野史男

それは、ラインなりゾーンなりにしても、やはりそういうようなものが出来るのは何故かということです。

谷岡武雄

極端に言えば、気候の違い。地中海性気候の分布範囲と西岸海洋性気候地帯の境界で説明ができるわけです。ミヤコとヒナとの違いというのは、山田先生がおっしゃった「自動車が走ればどこかで止まる。それは何故止まったのか、明らかにお話し下さい。」ということに関しては、ガソリンがなくなったから止まったということです。ミヤコの力がなくなったところで止まるわけです。そこに山があって障害があったから、もう少しガソリンを詰め込まなければその山は乗り越えられない、ということでは止まった

かもしれない。そういうことです。

西川 治

言語圏と人口の移動圏との重なり具合は、かなりよろしいわけです。東京に向かう人口と大阪に向かう人口の境というのが、上方の言語と関東の言語圏と関連がある。私は昭和35年に、県別ですが、東京に住んでいる人、大阪に住んでいる人に一年前に住んでいたのはどこか、というのを調べたことがありますけれども、東京圏と大阪圏を分けますと、大阪圏の境はまさに能登半島から浜名湖という線で決まっておる。言語学的には、この線は東西を分ける重要な線とされておりますが、未だにこの東京に集まる人と大阪に集まる人の圏域がこの線で分かれる。

山田安彦

そうすると竹内先生、イタリアの場合では何故そこに北と南の線を引くのかということですが。その点について、地形的なのか気候的なのか、あるいは文化力の違いというものがありますでしょうか。その点に関してお答え願えますでしょうか。

竹内啓一

北部社会それから南部社会のいくつかの違い、という点に関しましては、私が午前中に申し上げましたように、外部との、具体的には北西ヨーロッパとの距離といったような地理的条件、それから、これは先ほど谷岡先生がおっしゃったこととも関係しますけれども、地中海式気候というものの持つ意味が大きいと思います。具体的には夏の乾燥が非常に甚だしいために、北西ヨーロッパ的な近代農業の、輪作体系で生産力を高めるという方向か、近代的な農業という灌漑設備を施すか、あるいはテラスを作って樹木農業を導入しなければならない南部と、それから一応夏作物を作ることがだいたい可能な北部および中部の大部分というような違いがありますけれども、具体的に現在引かれている境界、イタリア人の誰もが了解している北部と南部との境界というのは、歴史的なものであります。

山田安彦

これに関連して、ご質問ございませんでしょうか。

髙木奎治郎（千葉大）

私の専門分野はアメリカの基礎文化史で、教養部で山田先生の東北日本と西南日本という講義を分担しております。谷岡先生にお聞きしたいのですが、ミヤコとヒナと2つの操作概念で分析なさる、それは非常におもしろいのですが、しかし、京都には独特の文化があった。文化ということなら、私はどの地方にも文化があると思います。しかし、文明ということならば、かなり高度にいろいろな物質文化が発達したところではなかろうか、と思うのです。日本は狭い国だとはいいますが、大変多様性があって、私は東北日本と西南日本という役割交換が大切であると思いますけれども、アメリカほど単調ではなくて、ローカルな匂いがそれぞれに強いと思います。

山田安彦

先生は文化と文明によってどう分けるかということと、もう一つは東と西に分けられていないところがあるのではないかという話だったのですが、次に東北日本と西南日本というような二極性が正当であるのか否かという話がございますから、その時にまた続けたいと思います。高野先生とか他の先生がお話になった中で、明治以降と明治以前と分けるべきではないか、という共通のお話がありました。技術が発達していくことによって地域差あるいは地方差が生じるのではないか、ということを末尾先生がおっしゃってましたので、水車を取りあげてみても、技術革新によって先進性と後進性とを分けられるのかということにもつながってくるわけで、末尾先生その辺りに関していかがでしょうか。

末尾至行

水力資源の開発問題、要するに資源の開発状況がいかにその地域と結びついてきたのか、地方差があったのか無かったのか、ということでございますが、資源の中でも水力といえますのは、どちらかとい

ますと、例えば地下資源なんかですと土地によって存在しているところとしていないところが極端に差があるわけですが、水力は割合面的である。もちろん、水力というのは水量落差ということで、言い換えますと降水量と海拔高度、それと高度差というものを掛け合わせたものであります。高野先生は日本アルプスは、あるいは赤石とかは、東北・西南を分ける境であるということを主張されていますけれど、水力の面からいいますと、一番豊富なところなのでこれをどちらに持っていくのかということ是非常に問題がある。水車の数からいいますと、信州が日本一の水車の集中地域です。

先ほどの山田先生のお話ですけれども、技術革新というものによって、どういうふうに地域が変わっていったかということでございますけれども、私は水車段階と水力発電段階と大きく2つに分けて問題を見ようとしたわけです。水車段階というのは、その土地土地の水力資源というものを保守的に利用するということです。先ほども山田先生の方から地域というものの捉え方、東北日本と西南日本は結節性からまとまりがあるのか、それとも特質性からまとまりがあるのか、というお話がありましたけれども、どうも水車段階でみますと、これは等質性ということで理解せざるを得ないのではないかと思います。これが水力発電段階になりますと、やはり需要地と水力発電所との間が送電線で結ばれるということで、それを通じて中心とそれから中心以外の所が線で結ばれるという、結節性を示すような図が何となく頭の中に描かれてくるわけです。これが段々と送電距離が伸びて行きますと、資源開発は周辺部だけれども消費地としては中心という結節性が出てくるのではないかと。この地域が、次第に大きくなっていきます。

山田安彦

どうもありがとうございました。元木先生には後でまた質問がありますので、後で答えてもらうこと

にいたしまして。

元木 靖

ちょっと一言よろしいでしょうか。私がほかの先生方と一番違っているのは、東北日本と西南日本ということ自体を考えるというよりは、むしろそういうものがあるものだという前提にたって、稲作を考えてみたいということであります。年配の方と、若い青年層の方とでは水田の捉え方が違う。青年層の方では、この大河川の下流の力をよく引き出して、このような水田をよくも作ったという感心する意識であったのに対して、年配の方は、かつてと比べて大分様相が変わった、というように捉えた。もちろん、そういう場所が出来てくる経過からしますと、年配の方の見方が正しいわけです。そのような東日本側の水田に対して、西日本でもそういった低湿な環境は利用されたのでしょくけれど、同じ低湿な環境といっても違っていたのではなからうかという気がいたします。米の品種自体を取りましても東北日本と西南日本とでは非常に大きな差がありまして、したがって農家が稲作をやっていく時の取り組み方といたしますか、それにも随分差異があったのではないかと思います。そういう差異が、近代以降の歴史の中で西南日本と東北日本の交流の中でだんだんと消えてきた。もう一点は、東北日本と西南日本との境界の問題でございますけれど、水田のように土地条件にかかわる問題に関しては、その差がはっきり出ているように感じます。

モチ米の場合は、相当余裕がないと量産はしない。だいたい、余裕があった場合にモチ米を作る。あるいは、非常に立地条件の悪いところにモチ米を作る、といったことをやってきたように見えます。しかし、食という観点から見ますと、非常においしいものであった。従来のモチ米の、食の環境というものを西南日本と東北日本と分けてみますと、非常にはっきりと西南日本の方は丸い餅、東北日本の方は四角い餅という結果が出てきたわけです。

山田安彦

どうもありがとうございました。境界線をどこに引くかということから、ずいぶん発展致しまして、各先生方とも午前中お話できなかった部分を補足しながらお話し願ったと思うのですが、境界線をどこに引くか、両極いかにして設けるか、ということについては問題はこれくらいにしまして、これにちなんで各発表者の中からお話がありましたように、2つに分けることは無理なのではないか、2つに分けるのは良いのかどうか、というお話がありましたが、これについて聴講されている先生方の中から質問がございします。これは、両極に分けることが正当なのか、あるいは正当でないのか。もし、正当であるとすれば何を根拠にするのか、という非常に難しい質問があります。細長く国土が並んでおりますと、どうしても北と南、東と西というように分かれてしまうのではないかと思います。

木下 良（国学院大）

私は出身が九州で、それから京都と大阪に30年ほど住んでおりまして、それから関東へ出てきて、それからちょうど中間地域の富山に5年おりまして、それからまた関東へ戻って来た。実感を先に申し上げますと、ひとつはミヤコとヒナということで、まず意識がある。そういう意味で言葉とか、そういう基調になるものというのは、やはり東北と西南の違いがあるように思います。

山田安彦

両極性とか両分性というのは正当性があるのかなのかという質問なのですが、もちろん両極性と両分性とは意味が違います。両分性というのは、分類に関する論理の中では非常に幼稚であるということになっているのですが、そういう分け方ではなくて、いま末尾先生からありましたように、東と西と真ん中ということ、あるいは東も西も所属しないものもあるのではないかと、これが一般的な分類なのですが、菊地利夫先生から、それなのになぜ両極に

分けるのか、それを全問題提起者に聞いてくれという質問があります。非常に難しいことなのですが、両分性というのはいったいその根拠をどこに置くのか、なぜそんなに両分性に分けなければならないのかということなのですが。

菊地利夫

二分論とそれ以外に三分論も四分論もあるが、そのような多分論に対して二分論を選択すること、どのような意味があるのか。

山田安彦

私なりに伺いますと、いろいろな区分の仕方があるのですが、両分性の根拠は何か、さらにその両分性になりますと比較という問題になりますが、比較から何が生まれるのか、何の意味があるのか、こういうお話なのです。問題提起の先生方向かありますでしょうか。一般的に地理でいわれる地域性、地域差、差異、共通性、特異性はいったいどういうところから生まれるのか、という質問で、あらゆる質問が混在しているのですが、整理致しますと、両分性という、つまり東と西に分ける根拠は何か、そして、その比較をすることによって何が生まれるのか、こういう質問なのですが。お聞きの先生方、これに関連して何かございますでしょうか。

鶴木奎治郎

私はもともと哲学科出身なものですから、こういったカテゴリーに分けるのは本職みたいなものですが、自然科学に近い性格、実証的な性格があるこの学会で、こういうことが問題となるとはあまり思いませんでした。簡単にいうと、便利だから東北日本と西南日本とを分ける。それはいろいろな、例えば東京の文化と大阪の文化を対比するという時には非常に便利です。しかしまた別の分け方もあるわけで、例えば日本海側と太平洋側という分け方を致しますと、これは秋田県から山口県まで共通性がある。その時はまた、私は別のカテゴリーを使って別な分け方をすればいいだろうと思うのです。アメリカ

研究の場合でも、地域区分をいくつものインデックスによって何回もやり直すという例がございますので、私は便利だからそうしてあるだけだと。便利が悪くなれば他の分け方をすればよろしいのだと思います。

山田安彦

西川先生に答えていただけますでしょうか。両分性の根拠は何なのか、比較によって何が生まれるのか、何の意味があるのか。

西川 治

発表の中で申し上げたつもりでいましたけれど、従来の二分性に関する研究はたくさんあります。根本的なもののように見えて出発点にすぎないということにもなりかねないので、どうしたら良いのかと思うのですが。私が参加した理由は、最初に申し上げましたが、明らかに東北と西南を大まかに分けられる点がある。ただ、これが日本の地域構造を見る上で、最も優れた、最も重要な区分であるとは誰もっていないわけですね。基盤は何と言っても日本列島の地形構造と海流とか気候とかにあるわけで、明らかにこの差は絶対に消えることがないのですね。ただ環境としての意味は変わりますけれども、日本列島の置かれている位置というのは、天変地異が起これない限り変わらない。そういう変わらない要素が、どこまで環境として時代を貫いて生き続けるかということが一つの問題だと思います。

この2つの区分は生態学的に説明可能であります。自然条件から来る地域の差異に人間社会が乗っかってくると、それを持続させる面とそれを乗り越えていく面と両方あるのは当然であります。江戸、大阪という2つの大きな結節の中心ができますと、その勢力圏が東西を二分するわけでございます。東と西とか、南と北とか分ける分け方ですけれど、これは位置的なもの、また交通条件によっても多少は変わりますけれども、そういう位置的に分けられた2つの区分と、それをさらに強化するのが2つの中心地

の勢力圏。その2つの地域の境が、特質地域、スベシフィックリージョンの境とかなり一致する。

山田安彦

どうもありがとうございます。なぜその両分性がよく続くのかということは、もう説明の要はないのではないかと思います。講演要旨の中に竹内先生が明確に書いておられるのですが、時間がかかりますので簡単に申し上げますと、偏見的なものがあるとか差別意識があるとかということがひとつと、経済的収奪性がある。それから両極の一方の地域と他方の地域の外国の地域のコンタクトの問題、それう諸々の民族的、経済的、および外国交渉史の状況によって、両極性というのは持続するのではないかということを書いておられるので、これは明確な答えであらうと思うのですが。

竹内啓一

少し補足いたしましょう。私は両分性と両極性というのは、少し違うのではないかと思います。極が2つあるということ自体は、東京と大阪という場合には両方の極の影響が及ばない所というのは当然出てくるわけです。政治的な問題として、スペインのカスティーリャとカタローニャということがしばしば取り上げられますけど、確かにこの2つは、非常に大きな極をなしています。ある国に2つの極があるという場合には、どちらにもつかない所が出てくる。両極性というのは、何らかの統一的な基準で2つに分けることです。この際には先ほどこらわれているように、基準の取り方によっていろいろな線が引かれるでしょうけれども、ほぼそれが一致するような形で国が2つの大きな部分に分かれる。

イタリアを例としてあげた場合には、それが非常に大きな国民社会全体の政治的問題あるいは社会的問題になっている。日本の東北日本と西南日本というのは、そのような意味での地域問題にはなっていないのではないか。そのような観点からいうと、日本の場合は、そのような運動というものがないとい

う点で、ほかの国のダイコトミーに比べた場合には、それほど顕著な対称をなしていないのではないかと思います。ただイタリアの場合には、多くの側面でそういう形で南部と北部という2つの対立がありますけれども、問題によっては2つではどうしても片付かない問題もいくつもあります。確かに4分法とか3分法とかいうものは、便宜的なものといえますか、また対象によって使い方を区別しなければいけないと私は考えております。

山田安彦

ありがとうございました。だいたいおわかり願えたかと思いますが、東北日本型と西南日本型と分けるのは、研究が便利のように、あるいは竹内先生が説明されたように、いろいろな研究の目的によって両分性にしたり3分法にしたり、あるいは多分法にしたりというようなことが行われるのではないかと思います。そうしますと、研究の手段とも考えられるわけで、社会経済史などでは畿内型と東北型に分けるというような概念もあるようです。谷岡先生の話によると、ミヤコとヒナとに分けるということでした。先生この件に関していかがでしょうか。

谷岡武雄

私の申し上げておりますのは、歴史地理学的に研究をしますと、その対象はどうしても、地表の上のランドマークがはっきりしたものをまず取り上げなければならぬ。したがって、私としては古代条里制の遺構、在家、それから環濠集落および耕作地というようにはっきりしたものを取り上げました。すべて中世以前でございます。中世以前のランドマークのはっきりしたものを歴史地理学的に捉えると、これは東北日本と西南日本という両分性で説明するよりも、ミヤコは京都にございましたので、ミヤコとヒナ、あるいは畿内型荘園と遠隔地荘園、辺境荘園とかいうような形の対比ができて、それによって説明ができると申し上げたのでございまして、それは現実でございまして、あるべき姿とはいっており

ません。

近世以降は権力の中心が江戸へ移りましたから、江戸は文化の中心として発展してまいりますので、そこではっきりと近世以降は両分性というのができてきた。それで両分性どころか、一極集中という方向へ向かっている。こういう現象が起こっているのです、地方の振興に努力して、あらためて両分性を見直し、あるべき姿をつかんでみたらどうだろうか。あるべき姿としては両分性というのは大事だと申し上げたいのです。

山田安彦

わかりました。これでご質問に対して各先生方から大体答えていただきました。私の手元にあります質問用紙は今のところこれでだいたいこなせたのではないかと思います。さらにもうひとつあるのですが、これは東北日本と西南日本との関係からややはずれるのですが、西南日本の棚田の開発時期と水田問題についてですが、元木先生、今後の水田改廃と水源の再利用ということはあるのでしょうか。棚田を開発するということはありますか。

元木 靖

結論的に申し上げますと、すでにそのような棚田の開発というのは中国地方等で進んでいる、という語弊がありますが、始まっているみたいでございます。

棚田というのは、とくに日本においてどのような意味を持つのだろうか。先ほど、西南日本と東北日本との間で稲作文化が伝わってくる過程で非常に大きな条件の違いがあって、差異が見られる。まったく仮説的な形でしか申し上げられないのですが、東北日本に稲作が伝わっていく大きな障害というのは、気候の問題を除きますと、とにかく大河川流域の治水の問題が基本にあるかと思います。いつ棚田ができたのであろうか、という問題でございますが、中世段階で棚田がたくさん作られるようになったという説もあります。古代の治水技術の段階では、大

規模な水田を視野に入れるとういことは非常に難しい。そうすると、どういう形で土地を開拓するという視点が出てきたのであろうか。私は、まだ大河川というものが視野にどうしても技術的な問題で捉えられない時に、溜池開発を進めて、その次の段階として棚田というものが作られたのではなかろうか、というように今の段階では考えています。

棚田の利用の問題ですけれども、先ほど申し上げましたように最近では棚田を水田と畑とあわせて農地整備をしていくという形で、山間地においては水田と畑とは別々に作られており、農地としては非常に小規模な範疇で作っていた。それを同時に成育するという方式で現代の機械化にあわせていくなかで、棚田を再生するという動きは出てきたと思います。

棚田の保全の必要性はどうかということについては、正直申し上げて私もよくは分かりません。といいますのは、棚田を保全するというのが、西南日本において、水路の保全にどの程度の効果を持っているのか。しかし、最近のように米を食べることが大変減ってきた。それから、どうしても労働生産性を高めざるを得ないということになってきますと、しかも米の流通する経路といいますのは全国的な流通ルートの中へ入っていくものですから、どの程度残す意義があるのかどうかということについては、私は今のところは返答することはできません。

山田安彦

どうもありがとうございました。もうひとつ西川先生に質問が入っているのですが、国際化時代における東北と西南日本の地域論に対する考え方をお聞かせ下さいということです。

西川 治

ひとつは空港の問題もあるわけですが、全町村2100の国際交流の実態を調べたのですが、外国と姉妹提携をしている町村の分布を見ますと、北海道が高い。それから意外と東北で高い。これは県や国を

素通りして、町村レベルで海外と姉妹提携をする実態を示しています。もうひとつ、そういう自治体レベルの国際交流の実態、それからハイテク産業の展開が、どのように進んでいるのか。いろいろな点からグローバルに見ますと、西南日本と東北日本の差が、どういう形で生きてきているのか。伝統があり、土地が集約的に利用され、それなりの都市文化が浸透しているという西南日本に対して、東北・北海道のようなところが新しい時代に、むしろ新しい動きをする可能性も出てくるのではないのでしょうか。

私は、こういう地域差の研究は当然歴史的に見なければいけないので、それぞれの時代までの積み重ねとして、それぞれの時代にどういうふうに地域差が現れているのかとういことをもっと正確に調べていかないといけないのではないだろうかと思います。西南と東北ではどうだったのでしょうか。都市の住民なり都市を支配している支配者層、豪商たちの活動などにどうい違いが現れてくるか。それが後の明治以降の近代化にどう反映しているのか。それを踏まえて全国総合開発計画ができてから、国の方針として北海道あるいは開発をしていない地域にむしろ巨額の投資をする。ある時代では遅れていたかもしれない地域が新しい時代には逆にリードする可能性もあるだろうと思います。

山田安彦

ありがとうございます。これで、私の手元にあります質問用紙を私なりに整理いたしまして、問題提起の先生方に答えていただきました。もう時間が相当延びておりますので、この辺で締めくくりたいと思いますが、最初にも申し上げましたように、ここで結論を出したいとか出すべきであるとか、あるいはここで決着をつけたいという意図はございません。2年間にわたりまして、標記の課題によってシンポジウムを持ちましたことは、歴史地理学会としていろいろな問題を明確にしたり、あるいは洗い直したり、あるいは相互に問題提起を認識し合うとい

うようなことになれば、何らかの意義があったのではないかというふうに思っています。

5人の先生方の内容を要約いたしますと、非常に舌たらずのまとめになるのですが、元木先生は、水田によって日本が大体同じような文化圏になるのではないかということです。しかし、その基礎には自然的な条件によってさらに地域差が出てくる。もうひとつ、私なりにおもしろいと思ったのは、敦賀湾と伊勢湾の所で水田の東進が一時停滞するということですが、なぜあそこに非常に強い寒気が訪れるのか、ということを本学の研究者が調査いたしました。それと何か関係あるのだろうかと思いを重ねていたのです。それから、末尾先生は、技術革新によってやはり地域差が現れてくるということでもあります。それによって、両分性は適当でない場合もあるので3分性あるいは多分性ということもふまえてみよう。というふうにおっしゃっていました。西川先生は、差異を強調するのも良いけれども、両者の違いが時代によってあるいは地域によって混在して互いに影響し合っていくというようなことがあるのではないか、それによって思想的な時代の中で分けていくということを説明されました。竹内先生は、いうまでもないのですが非常に地球的な、国際的な立場から東北日本・西南日本の話をしていただきまして、どうして地域的両分性が持続するのかということの詳細にお話していただきました。谷岡先生は、もうみなさん印象に残っておられると思いますが、ミヤコとヒナということで、中世以前ではそういう概念で分けてみたらどうか、時代によって環境帯が変化するというお話があったかと思います。

しかし、いずれにいたしましても、何故、地域構造が変わってしまったかということについてまだ討論を重ねたい気持ちもありますが、時間がすぎているので、このへんでまたの機会に譲りたいと思います。

今日は朝早くから遅くまで、長い間ご静聴下さり、またご協力いただきましてありがとうございました。